2017 年5月 27 日(土) 第 14 回「聖書で読み解く映画カフェ」上映作品

「天国の日々」の見どころ

Days of Heaven　1978 年製作　アメリカ映画　94 分

ストーリー

●第一次世界大戦が始まったころ、語り手のリンダ(リンダ・マンズ)と彼女の兄ビル(リチャード・ギア)、そして兄の恋人アビー(ブルック・アダムズ)は、農場の麦刈り人夫として雇われてテキサスに赴いていた。ビルは、「そのほうが世の中を渡りやすい」ので、アビーとは兄妹であると偽っていた。

農場での仕事はきつく、アビーは手を傷めてしまった。ビルは医者の馬車から薬を盗みに行き、医者が農場主のチャック(サム・シェパード)に余命 1 年を宣告しているのを聞いた。チャックはアビーに心惹かれていた。刈り入れが終わって労働者たちは帰ることになっていたが、チャックはアビーに残って欲しいと頼んだ。ビルにとっては農場主の財産を乗っ取るチャンスだった。チャックはアビーに求婚した。ビルはアビーに「どうせ長くない命だから」と説得し、結婚式を挙げた。

ビルたちは王様のような暮らしをすることができたが、やがてチャックはビルとアビーの関係に疑いを抱くようになった。巡行中の芸人たちが現れた夜、ビルとアビーが接吻している姿をみて、チャックの疑惑は確信に変わり、ビルに詰問した。ビルは芸人たちと一緒に立ち去ることにした。だが刈り入れの秋になると、ビルはバイクで戻ってきた。イナゴの大群が農作物を襲った。追い払おうとしたが農地が火事になってしまう。チャックの怒りも燃え上がった。チャックは銃を持ってビルを殺そうとしたが、ビルにドライバーで刺されて死んでしまった。ビルとアビーとリンダは逃亡したが、やがて見つかってしまい、ビルは射殺される。アビーはリンダを孤児院に入れたが、夜になるとリンダは脱走し、再会した友人と共に歩いていった。

上映前

＊おととしから昨年にかけて、「天国はほんとうにある」「天国からの奇跡」など、天に在る天国の映画が続いたが、この作品は、地上に天国を探し求める話。いわゆる”感動作”ではない。むしろ暗く、悲しい。

＊物語は、第一次大戦さなかのアメリカ中西部テキサスを舞台に、季節労働者となって農作物の収穫期に各地をさまよう移民たちの絶望と希望を描いたもの。

キャスト

ビル(リンダの兄)／リチャード・ギア

アビー(ビルの恋人)／ブルック・アダムズ

チャック(農場主)／サム・シェパード

リンダ(ビルの妹、ナレーター)／リンダ・マンズ

ベンソン(農場長)／ロバート・ウィルク

●主演のリチャード・ギアはこの作品に次いで撮影した「ミスター・グッドバーを探して」(77)で人気を博し、「アメリカン・ジゴロ」(80)「愛と青春の旅立ち」(82) でスター俳優の仲間入りを果たした。その後「シカゴ」「HACHI　約束の犬」も。

・恋人アビー役を演じたブルック・アダムズ、チャック役のサム・シェパード はこの作品が本格的映画デビュー、

・妹役のリンダ・マンズもそれぞれすばらしい演技で注目を集め、この映画がきっかけとなってキャリアを築いた。

・「真昼の決闘」(52)や「荒野の七人」(60)など、古くから脇役として活躍するロバート・ウィルクが 射るような眼差しでビルを威圧するベンソン役で、ベテランならではのいぶし銀の演技を見せつけている。

監督テレンス・マリック

①「地獄の逃避行 Bad Lands」(1973)⇒5 年後

②「天国の日々 Days of Heaven」(1978)⇒20 年後！

③「シン・レッド・ライン Thin Red Line」(1998)⇒7 年後

④「ニュー・ワールド New World 」(2005)⇒6 年後

⑤「ツリー・オブ・ライフ Tree of Life」(2011 ブラッド・ピットとショーン・ペンの共演。第 64 回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドールを獲得。)

・1973 年の初の長編監督作品「バッドランズ」(地獄の逃避行)以来、 約 40 年間に 5 作品(平均 8 年に 1 本)という寡作ぶり

・独特の撮影スタイル(後述)

・ギャラや役柄を問わず出演を熱望する大物俳優が列をなしていること、

・公の席になかなか出てこないこと

などから、生きながらにしてすでに “伝説の監督”と崇拝されている。

受賞

1978 年 アカデミー撮影賞受賞(ネストール・アルメンドロス)、作曲賞・音響賞・衣装デザイン賞にノミネート。

1979 年 カンヌ国際映画祭監督賞受賞。

1978 年 全米映画批評家協会賞の監督賞と撮影賞を受賞。

＊上記で分かるように、夕暮れ時の 20 分間の“マジック・アワー”を狙って撮影された映像が美しい。“映像のフェルメール”。

＊《クイズ①》 この映画のテーマは何でしょう？⇒フリーで様々。見る者の感性に任せる。この映画を見てあなたが一番強く感じたもの、それがこの映画の“あなたのテーマ”です。

＊《クイズ②》聖書出来事のモチーフが豊富。⇒どこのどんな話と似てますか？

上映後

●類似作品: 一人の女を奪い合う構成はジョン・フォード監督の「怒りの葡萄」や「タバコ・ロード」を、また貨物列車に群がって旅をする労働者たちの姿は、エリア・カザン監督の「エデンの東」を思い出させる。ラストシーンは、ルネ・クレマンの「禁じられた遊び」。

●マリック作品の特徴:

① 一切の「計算」を排した、自然で流動的な撮り方:

・打ち合わせや リハーサルを嫌い、現場でいきなり始めようとする。だから、誰もが生まれて初めてそのシーンを演じる形になる。

・ミスや突発的な出来事をわざと求める。そういうシーンはウソがないから。

・役者にとって演じることそのものに自由度があることが出演を熱望する理由。

② ナレーション手法: この作品でも、妹マンツの素朴なナレーションによって語られる。この映画で、唯一、何の人間関係のしがらみのない彼女に、登場人物の生きざまを自由に語らせることによって、作品を客観的に、またある意味メルヘンティックに見させることに成功している。

③ テーマの多様性: “青春映画”なのに、恋愛、嫉妬、生命の尊さとはかなさ、人間の弱さ、強さ、怖さ、欲望、天国と地獄、天使と悪魔、生と死、など全てのテーマが表現されている。

・自由に作られ、見る者の自由な捉え方を可能にした。

④ 映像の“絵画化”: 欧米の絵画の偉大な遺産が目の前で展開。

＊農場主の縦のイメージの家⇒エドワード・ホッパーの「線路脇の家」。

＊どこまでも続く広大な畑の遠近感⇒アンドリュー・ワイエスの「クリスティーナの世界」。

＊収穫に集まった貧しい出稼ぎの労働者たち⇒ミレーの「種まく人」。

＊室内のカーテン越しの部屋に差し込む日の光と夜の陰影⇒フェルメールの一連の作品が影響。

●そのために用いられた自然光重視:

人工的な光も、フィルターも使わず、自然光を生かした。

＊室内シーン: 画家フェルメールの絵画のように、窓から入り込む光や一つの光源しか使わない方法を用いた。

＊屋外の夕暮れ時のシーン: 全て“マジック・アワー（魔法の時間）”と呼ばれる、日が沈んでから完全に夜になるまでの約 20 分ほどの時間に撮影。この時間は、沈んでしまった太陽から漏れたほのかな光がどこからともなく差し込んできて風景全体を柔らかく包むため、自然や人物が劇的に美しく見える。撮影のチャンスが 1 日 20 分（！）しかないため、長尺の映画のほとんどをこの時間での撮影に費やすことは極めて異例であった。

●その結果としての映像美:

・地平線のかなたまで続く広大な大平原と苛酷な麦刈りの光景: アメリカの原風景。ウォーカー・エバンスが大恐慌下の南部農民を捉えた写真を想起させる。

・20 世紀初頭のテキサスの農場を舞台に、雇われた労働者たちの姿: 人間の営みや移民の悲哀、その弱さともろさ、若者の青春の 挫折といった、幾つもの壮大で普遍的なテーマを、 自然と共に暮らす人々の日常や細やかな感情表現の積み重ねで浮かび上がらせてゆく作風。

●それを可能にした撮影監督ネストール・アルメンドロス:

＊スペイン生まれのキューバ育ち。父親が作家でフランコ独裁政権から逃れるためにキューバに移り、 大学で文学と哲学を学ぶかたわら短編映画を撮っていた。その後、ニューヨーク市立大学やイタリア国立映画実験センターなどで映画を学んだ後、 カストロの革命が起こり、カストロに批判的なドキュメンタリー映画に取り組んでいたことがきっかけとなってヌーヴェルバーグが注目されていたフランスへ脱出。 エリック・ロメールやトリュフォーの作品の多くを手掛けたという異色の経歴の持ち主。

＊ハスケル・ウェクスラー: フランソワ・トリュフォー監督の「恋愛日記」の撮影が決まっていて、撮影の途中でフランスに帰国しなければならなくなったアルメンドロスの指名で後を引き継ぐ。作風をうまく合わせ、アルメンドロスも見分けがつかないほどの完成度に。

＊イナゴが襲来するシーンではカナダの農業省に集めてもらった本物の数千匹のイナゴが使われている。ただしロングショットで大群を捉えたシーンはピーナッツの殻などをばら撒いた映像による。

＊実際のロケ地: テキサスではなく、カナダのアルバータ州南部。①経済的な理由、②栽培されている麦が昔ながらのものであったこと、③そこでの生活が映画の雰囲気とマッチしていたため。

・住民は迫害を逃れてやってきたフッター派（アナバプテストの流れを汲む）の人々であり、現代文明から隔絶された生活を守っていた。彼らはエキストラとして映画に参加している。

聖書で読み解く

① 聖書のモチーフ:

① 「天国の日々」という題名は旧約聖書の「申命記」に出てくる言葉から取られたもの。「申命記」はモーセが約束の地に入るイスラエル人に対して与えた律法と言われ、「唯一の神ヤーウェを愛していれば約束の地(天国)に住む日数＝天国の日々が多くなる」ことが強調されている。(12:10, 11)

② 全体の構成は「創世記」から借りたもの(ビルとアビーが兄妹と偽るのはアブラハムとサラの関係と同じ)

③ 小麦の刈り入れは「ルツ記」。

④ イナゴの来襲は「出エジプト記」の十の災いの一つ。

⑤ 神による「最後の審判」の話は「ヨハネの黙示録」。

② 映画の構造＝創造者の神の目から見た人間の俯瞰図:

広大な農場と、生き物たちを、マジック・アワーと呼ばれる限られた時間帯で撮影した自然の驚異の美しさの中に、「天(神)が創りしもの」の一種の厳かさ・静けさと、その中で生きる「部分」「要素」としての人間の姿が、天(神の視座)から俯瞰したように感じさせる。

(使徒 17:28)「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。」

③ 自然の管理をゆだねられた人間の責任:

＊前半で示した人間と自然の共生を、後半の大火事で自然の脅威を描くことで、前半の自然の人間に対する親密性を覆している。⇒自然の復讐。

＊しかし、自然が人間にとって有益なものであるか、有害なものであるかは人間にかかっている。自然が人間に恩恵をもたらすのは人間が種をまいたからであるし、危害を加えるのは我を忘れて火をともしてしまったからだ。

(創世記 1:28)「神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

④ 罪の容認の中に、天国はあらず: 「創世記」のアブラハムが、2 度までも妻サラを妹と偽って身の安全を図った罪は、神ご自身のご介入によって、パロが彼女の素性を知り、彼女が心ならずも姦淫の罪を犯す一歩手前で救われた。それは神の哀れみだった。だが、この地上に天国(富・幸福)を求めても、恋人の貞操を犠牲にしてまで富を手に入れようとしたビルの行為には、最後に神の裁きのみ手が下る。“罪”をそのままにして、「天国の日々」は私たちのものにはならないのだ。

⑤「天国の日々」は、どこに？⇒毎日の生活の中に:

＊私たちは、この「天国の日々」にあこがれ、それを求めて旅に出たり、いろいろ試みたりするが(「青い鳥」のチルチル、ミチルのように)、実は、自分が天国の日々を過ごしていることを忘れて生きているのではないか？

＊「天国の日々」、それは、現実の生活の厳しさ、苦しさから逃れるべく、永遠の理想郷を求めてむなしい努力をすることではない。その現実の中に神様のご臨在を体験し、どんなときにも、“神、我と共にいます”(インマヌエル)の信仰に生きる、ささやかな毎日の営みの中にあるのではないか？

(ルカ 17:21)「神の国(=天国の日々)は、あなたがたのただ中にあるのです。」

★聖書で読み解く映画って、本当にいいものですね。

ではまた、次回お会いしましょう。ハレルヤ！ハレルヤ！ ハレルヤ！